



*Fantasmagorie de Robertson dans le Cour des Capucines en 1797.*

研究対象は、人間が操作し媒介して生成する可視的事物、つまりは映像です。なかでも「大衆」と呼ばれる多くの人々に向けて制作される映像、具体的にいうと、19世紀末に誕生した映画（実写およびアニメーション）とその隣接領域である写真、マンガ、テレビ、ゲーム等を研究してきました。

特定の媒体に完結しない「映像」を研究の軸に選ぶことで、現代視覚文化を領域横断的に把握できるのではないかと考えています。関心は、映像制作における力学の解明にくわえ、わたしたちが映像とどんな関係を持ってきたのか、または持ちうるのかという問題にもあります。

映像制作とその受容は、インターネット環境が整備される前から、隔絶していたわけではありません。受容者の思わぬ解釈が制作を刺激し、新しいジャンルの誕生に至ったこともあります。

研究目標のひとつは、「大衆」という語で一括りにされてきた受容者のなかでも、とくに「女子ども」と呼ばれてきた人々が映像と培ってきた多様な関係を言語化することにあります。

博士論文執筆時、ファシスト政権下のイタリア映画の大半が、プロパガンダではなく、ハリウッド映画を模倣したコメディであったことを知り、映像文化の一筋縄ではいかない多層性に気づきました。

以来、ファシスト政権下のイタリアから現代日本まで、かなり雑食ぎみに研究しています。

図版は、18世紀末からヨーロッパで流行した幻灯「ファンタスマゴリー」を楽しむ人々です。本気で怖がっている人もいれば、怖がっている「振り」をしている人もいるよう思える点に、興味を惹かれます。